

介護福祉実習前、実習中、実習後における学生の介護実践記録行動

The care record behaviors of a student at the welfare college before, during and after care practice

渡辺修宏

Watanabe Nobuhiro

水戸看護福祉専門学校

Mito Nursing & Welfare College

Key words: welfare college student, recording skill, care record behaviors,

問題と目的

日本語の文章能力が不足している学生は少なくない(岡本, 2012)。文章を書けない学生の多くは、「考えること」ができて「書くこと」ができないという(岩井, 2009)。このような事態は、介護福祉士を目指す学生においても例外ではなく、彼らの多くは介護実践記録の作成に苦慮している。すなわち、「(記録が)書けない」のである。渡辺(2013)は、記録作成に課題を抱える学生を対象に、介護福祉実習における介護実践記録の作成のための指導とその効果について検討した。そこで本研究は、渡辺(2013)で報告された学生の記述行動が、実習終了後にどの程度維持されたかについて検討する。

方法

参加者 本研究の者は、介護福祉士養成課程1年次に在籍する男性Aであった。Aは介護福祉士養成校に入学した直後より、レポートや実習日誌などの作成に対する不安を表出していた。

期間 Aが介護福祉士養成校に入学して半月後(4月下旬)より、12月中旬までの約9か月間であった。

手続き 介護実践記録の作成に不安を抱えるAに対し、課外で、記録作成の演習としてレポートを作成するよう指示した(介護実践記録作成にかかわる正規授業は、「介護総合演習」で2コマ/1週)。レポート用紙はA4サイズ1枚(24文字×15行、360文字数)で、課題はランダムに提示された。Aがレポートを完成させた際、その直後に研究者がAを言語的に賞賛した。レポート作成は、介護福祉士養成校の教職員室で実施された。介護福祉実習中、Aは実習日誌を作成し、それをレポートと同じ扱いとして記録した。実習終了後は、実習終了前と同様の手続きを行った。

独立変数 (1) レポート用紙の縦枠線の設定。この設定は、①1文字単位の黒太枠線、②1文字単位の黒細枠線、③1文字単位の黒点枠線、④2文字単位の黒点枠線、⑤枠線なし、の順番にフェイディングされた。(2) 言語指示: 「段落をつけて書きなさい」

従属変数 レポート作成における以下の項目を従属変数とした。(1) マス内記入率、(2) レポート作成時間、(3) 段落数(文頭1文字あけと、必要に応じた改行)。

倫理的配慮 研究は、参加者への研究参加の説明と同意

のもと行われた。参加者は、いつでも自由に研究参加を辞退することができた。

結果と考察

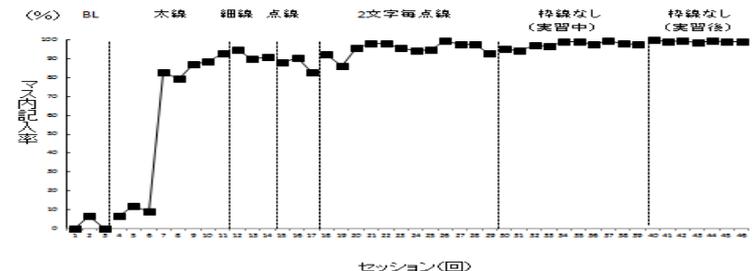


図1 レポートマス目内記入率の推移

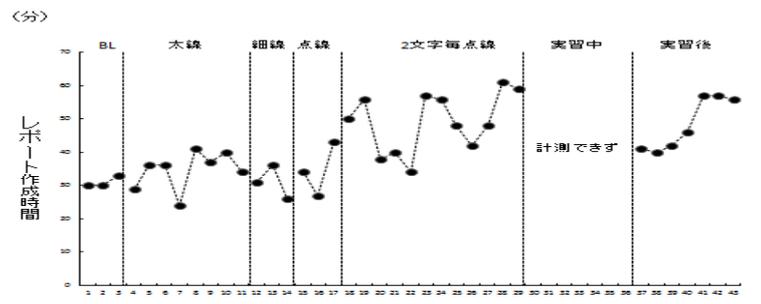


図2 レポート作成時間の推移

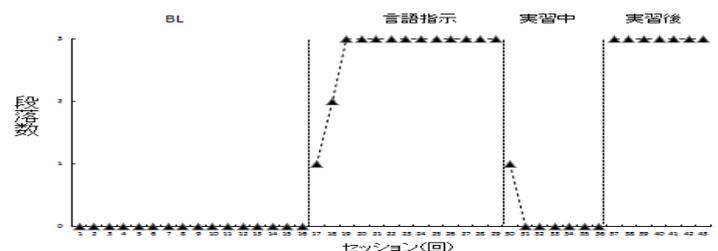


図3 レポート内の段落数の推移

Aのレポートのマス目内記入率を図1に、レポートの作成時間を図2に、レポートにおける段落数を図3に示した。レポート用紙記述欄内の記入率は介入によって向上し、介入が除去された実習中と、実習終了後においてもそれは維持された。段落は、言語指示によって生じられるようになったが実習中は低減し、実習後に再び生じられるようになった。

参考文献

- 岩井恵子(2009). 思考力を育てる実習記録への試み, 大阪体育大学短期大学部研究紀要 10, 17-32
- 岡本真理子(2012). 介護実習記録作成能力と日本語表現・教養ゼミナールの成績との関連性, 東海学院大学紀要 6, 45-51
- 渡辺修宏(2013). 介護福祉士養成校の学生に対する介護実践記録の指導, 対人援助学会第5回年次大会大会プログラム・発表論文集, 37